

# 海士町立海士小学校（平成29・30年度）

## 1. 研究の主題

### （1）研究主題

自他を大切にしていって学び合い、意欲的に行動する子どもの育成

### （2）主題設定の背景（理由）

#### ①児童の実態から

本校の児童は、恵まれた自然の中で明るく素直に育ち、学習や運動に前向きに取り組んでいる。小規模校であることから、異学年同士の交流も多く、男女の仲も良い。しかし、幼いころからの人間関係が固定されがちで、友だちを多面的に見ることができにくいところがある。また、まわりの目を気にして正しいと思うことでも躊躇したり、やればできるのに尻込みしてしまったり、発表に自信がもてなかったりすることもある。

そういった実態を踏まえ、自分のよさや友だちのよさを認識し、互いの思いや考えも大切にしていって学び合っていってほしいと考えた。そして、互いを認め合う集団の中で、自信をもち、自ら考え、意欲的に行動する児童を育てていってきたいと考えた。

本校では、これまで授業や様々な活動を通して、自分の思いや考えを豊かに表現できる子どもの育成を目指してきたが、今後さらに、人権教育の推進を通じて、自分を大切にすることができ、同じように友だちやまわりの人を大切にすることができる子ども、堂々と自己表現ができる子どもを育成していってることが必要だと考えた。

#### ②本校の教育目標から

本校では、児童・地域の実態や家庭・地域・教職員の願い、そして日本国憲法・教育基本法・学校教育法に基づき、次のような教育目標及びめざす児童像を設定している。

##### <学校教育目標>

「志をもって意欲的に学び、自律心と思いやりの心をもつ、たくましい海士の子」

##### <めざす児童像>

- ・気づき、考え、学び、意欲的に思いを伝える子（かしこく）
- ・気づき、互いに認め合い、高め合える思いやりのある子（やさしく）
- ・たくましい心と体をもち、めあてに向かって粘り強く取り組む子（たくましく）

#### ③人権教育の目標から

人権教育の指導等に関する調査研究会議では、「人権教育の指導方法等の在り方について [第三次とりまとめ]」において、次のように示している。

一人一人の児童生徒がその発達段階に応じ、人権の意識・内容や重要性について理解し、[自分の大切さとともに他の人の大切さを認めること]ができるようになり、それが様々な場面や状況下での具体的な態度や行動に現れるとともに、人権が尊重される社会づくりに向けた行動につながるようにすることが、人権教育の目標である。

島根県教育委員会では、「人権教育指導資料第2集 しまねがめざす人権教育(学校教育編)」において、人権教育とは同和教育の成果である「進路保障」を柱とした教育活動であるとしている。「進路保障」の理念に基づいた取組は、教育活動のあらゆる場面で行われる。学校が組織として「進路保障」の取組を推進していってることにより、子どもたちは、自分が大切にされた体験を通じて自尊感情を高め、他の人を大切にしようという態度や意欲を身に付けていって。自他の人権を守ることができる子どもたちの育成は、あらゆる差別や人権侵害のない「人権という普遍的な文化」の創造、という人権教育の目標につながるとしている。

そして、人権教育を進める視点として次の点を挙げている。

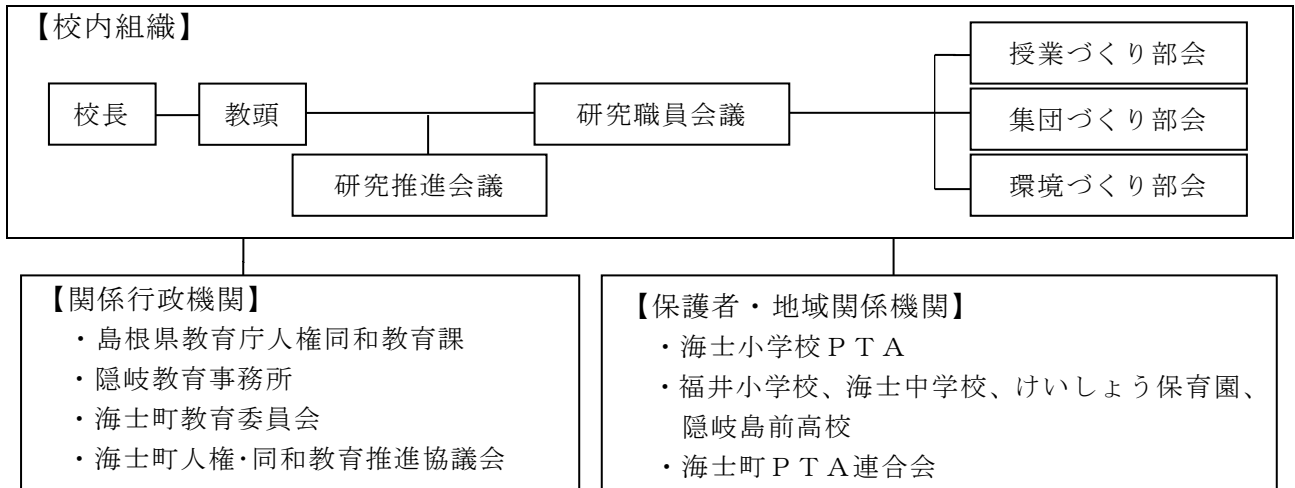
- ①人権としての教育（子どもたち一人一人の学びの保障）
- ②人権を通じての教育（人権が尊重される環境づくり）
- ③人権についての教育（人権に関する知的理解と人権感覚の育成）

これらのことを踏まえ、一人一人の学びが保障されること、人権が尊重される環境をつくること、人権に関する知的理解を深めること、人権感覚を磨くこと等は、人権教育のねらいに迫るものであると考える。

以上のことから、本主題を設定して研究実践に取り組むことにした。

## 2. 研究の推進体制

校内及び関係機関の研究推進体制は、次の通りとする。



## 3. 研究の内容等

### (1) 研究の内容等・実施日程

#### ○研究仮説

##### 【研究仮説】

- ①人権尊重の視点に立った授業づくりや、人権に関する知的理解を深め、人権感覚を高める授業づくりを工夫すれば、一人一人の自己肯定感を高めるとともに、まわりの大切さに気づき、人権を大切にしていける態度を育てることができるであろう。
- ②人との関わりを広げ、一人一人の自主性を高め、仲間を大切にし合えるような指導の充実を図ることで、安心してすごせる集団づくりに努めれば、自他を大切にしたい、意欲的に行動する子どもを育成することができるであろう。
- ③学校、家庭、地域が連携して人権教育を推進すれば、子どもと大人が一緒になって人権意識を高めることができるであろう。

#### ○めざす児童像

上記の研究仮説を実証し、研究主題に迫るために、人権・同和教育全体計画で各学年別具体目標を以下のように設定した。

##### 【めざす児童像】

- (1) 自ら学ぶ意欲を高め、進んで考え、表現する子（基礎的な学力・進路保障）
- (2) 気づき、考え、正しい判断のできる子（かしこく）
- (3) 一人一人の人権を尊重し、温かい心で助け合う子（やさしく）
- (4) 自信をもって主体的に行動し、最後までやりぬく子（たくましく）

学年別具体目標			
	低学年	中学年	高学年
(1) 基礎的な 学力	○自分の気持ちを言葉や文に表すことができる。 ○話す人の顔を見て、人の話を最後まで聞くことができる。	○自分の気持ちを言葉や文にして相手に伝えることができる。 ○人の話を聞き、自分の考えを伝えることができる。	○自分の思いを言葉や文にして相手に伝えることができる。 ○人の話を自分の考えと比べながら聞き、自分の考えを適切に表現する。
(2) かしこく	○友だちを男女や好き嫌いなどで差別をしてはいけないことを理解することができる。 ○友だちを傷つける言動に気がつくことができる。	○身のまわりの差別に気づき、それをなくす方法を考える。 ○相手の気持ちを考えた言動ができる。	○不合理な差別があることを見抜き、正しい向き合い方を考えることができる。 ○相手が嫌な気持ちにならないように、自分の考えを伝える言い方や言葉づかいができる。
(3) やさしく	○友達のよいところを見つめることができる。	○友達のよいところを見つけ、互いにほめ合ったり助け合ったりできる。 ○一人一人の違いを受け入れることができる。	○友だちのよさを認め、ともに伸びていこうとする。 ○多様な視点があることを理解し、認め合う。
(4) たくましく	○めあてに向かって意欲をもつことができる。 ○自分のよさに気づく。 ○自分が正しいと思ったことをはっきりと言う。	○めあてに向かってねばり強く取り組む。 ○自分のよさに気づき、自分を大切にできる。 ○自分が正しいと思ったことを行動に移す。	○自分の考えで行動する強い意志をもち、最後までやり抜く。 ○自分を大切にし、自分のよさを伸ばそうとする。 ○正しいと思ったことをはっきりと主張し、ねばり強く行動する。

## ○研究内容

### ◎授業づくり部…研究仮説①②

授業づくり部では、主に道徳科の授業の中で以下のような指導方法と学習過程・学習形態の工夫に取り組むこととした。

- ①児童一人一人が思いや考えをもち、意欲的に学習に取り組む指導の工夫
- ②お互いの思いや考えを伝え合う活動を取り入れた学習過程・学習形態の工夫
- ③年間カリキュラムを活用した各教科等・体験活動等との関連的指導を工夫した道徳科の授業実践

### ◎集団づくり部…研究仮説②

集団づくり部としての目標は、「安心してすごせる集団づくり」とした。また、具体的な取組の観点を、次のように考え取り組んだ。

- ①人との関わりを広げる。 → 集団づくりの土台
- ②一人一人の自主性を高める。 → 意欲的に行動する子ども
- ③仲間を大切にしよう。 → 自他を大切にしよう子ども

◎環境づくり部…研究仮説③

環境づくり部では、以下のような取組を行った。

<p>①学校・家庭・地域の連携づくり</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・保護者を対象とした参観授業・研修会の実施</li> <li>・学校の人権教育の取組への保護者・地域の参画の推進</li> <li>・参観日の工夫（祖父母参観日・まごころ参観日）</li> <li>・P T A活動の工夫</li> </ul> <p>②人権尊重の視点に立った環境づくり</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・人権意識を高める雰囲気醸成する校内環境づくりの充実</li> <li>・人間関係を深め安心して生活・学習ができる教室環境づくりの充実</li> </ul> <p>③職員研修の充実</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・職員の人権感覚を高める研修会の定期的実施</li> <li>・校内外の研修会への積極的参加</li> </ul>
---

○研究の実施日程（平成30年度）

時 期	研 究 内 容	備 考
	<p>①「授業づくり」に係る取組</p> <p>②「集団づくり」に係る取組</p> <p>③「環境づくり」に係る取組</p> <p>☆保護者・地域と連携した取組</p>	
4月18日	P T A代議員会<③☆>	保護者役員 管理職 11名
4月20日	縦割り班開き<②>	
4月21日	参観日・P T A総会<①③☆>	全保護者 全教職員 60名
5月7日	P T A合同部会<③☆>	保護者役員 全教員 20名
5月14日	研究職員会議<①>	参加者 11名
	・研究主題の共通理解・内容の具体化	
	・研究計画の立案・検討	
5月27日	P T A主催『なかよし運動会』<②③☆>	全保護者 全教職員 60名
6月中	学校生活アンケートの実施と分析<②>	
	アンケートQ-Uの実施・分析<②>	
6月4日	研究職員会議<①>	参加者 11名
6月8日	計画訪問指導<①②>	参加者 14名
6月27日	校内研究授業（5・6年 道徳）<①>	参加者 15名
6月28日	祖父母参観日<①③☆>	祖父母 保護者 民生児童委員 町人権・同和教育推進協議会 30名
7月3日	校内研究授業（2年 道徳）<①>	参加者 15名
7月9日	研究職員会議<①>	参加者 11名
夏休み中	年間カリキュラム表の整理<①>	
	校内環境の整備<③>	
8月27日	研究職員会議<①>	参加者 14名

9月3日	研究職員会議<①>	参加者	13名
9月6日	参観日<①>		
9月10日	研究職員会議<①>	参加者	11名
9月19日	研究職員会議<①>	参加者	11名
9月25日	校内訪問指導の実施<①③>	参加者	14名
9月26日	校内研究授業(3・4年 道徳)<①>	参加者	13名
10月1日	研究職員会議<①>	参加者	15名
10月7日	校区体育大会<②③☆>	地区の方 保護者 全教職員	100名
10月15日	研究職員会議<①②③>	参加者	15名
10月17日	まごころ参観日<①>	全保護者 全教職員	60名
		民生児童委員	35名
10月26日	研究職員会議<①②③>	参加者	11名
11月1日	人権教育研究発表会準備<①②③☆>		
11月2日	人権教育研究発表会<①②③☆>	町人権・同和教育推進協議会	25名
	人権・同和教育講演会<③☆>	他の学校、地域の方 区長等	100名
11月中	学校生活アンケートの実施と分析<②>		
	☆アンケートQ-Uの実施・分析<②>		
11月14日	研究職員会議<①>	参加者	11名
11月16日	ウォークラリー<②>		
11月26日	『学芸会』PTAと地域が連携した活動<②③>	地区の方 保護者 全教職員	100名
11月29日	校内訪問指導(3・4年道徳)<①>	参加者	13名
12月1日	「人権啓発メッセージ」募集<☆>	町人権・同和教育推進協議会主催	
12月3日	校内研究授業(1年 道徳)<①>		
12月5日	人権週間の取り組み<③>		
~23日	【アミーゴセクレト 人権コーナー		
12月9日	今月の歌の歌詞】		
冬休み中	全校PTA親子活動(科学実験教室)<③☆>	講師の方 全保護者 全教職員	60名
	校内環境の整備<③>		
1月21日	研究職員会議<①>	参加者	11名
1月17日	参観日<①>		
1月21日	研究職員会議<①>	参加者	11名
2月13日	校内訪問指導(3・4年道徳)<①>	参加者	13名
2月20日	校内訪問指導(1年道徳)<①>	参加者	13名
	校内訪問指導の実施<①③>		
2月中	教育相談<②>	全児童 全教職員	
	研究職員会議<①>	参加者	11名
2月~3月	教職員・保護者の学校評価の実施及び分析<③>		
	県学力調査結果より児童意識の分析<②>		
	研究のまとめ作成<①②③>		

## (2) 研究の成果と課題

○研究仮説①：人権に関する知的理解を深め、人権感覚を高める授業づくりについて

### 【成果】

①児童一人一人が思いや考えをもち、意欲的に学習に取り組む指導の工夫について

○どの児童も場面理解がしやすくなり、それが意欲的に考えをもち、伝えようとする自信につながってきた。

○めあてやテーマを最初に提示することで、進んで考えようとする主体性が身に付いてきた。

○全児童が自信をもって自分の考えを伝える姿が見られるようになってきた。

○自分のことにつなげて考える発言やふり返りに書く文章が増えてきた。

⇒人権に関する知的理解を深め、人権感覚を高める授業づくりの達成につながったと考えられる。

②お互いの思いや考えを伝え合う活動を取り入れた学習過程・学習形態の工夫について

- それぞれの学年の発達段階に合った方法をとることで、自分の思いや考えを素直にのびのびと伝えることができるようになってきた。
- 全児童が授業中に自主的に発表できるようになってきた。
- 板書の工夫により、自分の考えと友達の考えを比べて考えを深めることができるようになってきた。
- 友達の発表を聞く姿勢が向上してきた。
- 意欲的に伝え合い、聞き合う雰囲気友達が友達に自分の考えを伝えられる安心感につながってきた。

⇒安心して過ごせる仲間づくりの向上につながったと考えられる。

③年間カリキュラムを活用した各教科等・体験活動等との関連的指導を工夫した道徳科の授業実践について

- 各教科や行事で教職員が各時期のめあてを意識することで、よりめあてにせまる指導をすることができようになってきた。
- 児童自身もより強くめあてを意識できるようになってきた。
- 道徳科や各教科の授業中に「この間の○○だ」と、他教科や他の活動を想起し、関連づけて考える児童の姿も見られるようになってきた。
- 「がんばる自分大すき」の時期には、各学年、各活動で一人一人のがんばりが光っているように感じた。
  - ・児童ががんばることに意義をもって活動していた。
  - ・教職員が児童のがんばりを意図的に見つけ、認め、褒めて学級全体に広げることができた。
  - ・児童ががんばりきったことや周りから認められたことで、がんばった達成感をもつことができた。

⇒人権に関する知的理解を深め、人権感覚を高める授業づくりの達成と、安心して過ごせる仲間づくりの向上につながったと考えられる。

○研究仮説②：安心してすごせる集団づくりについて

集団づくりの取組を振り返ってみると、集団のなかで重要な役割を果たしているのは、やはり高学年である。高学年がモデルとなって、それが下学年に受け継がれていくのが海士小学校のよさであるといえる。そこで、高学年を対象に（比較として中学年にも実施）、集団づくりに関わるアンケートを実施した。

(2018年9月)

	3・4年生 肯定的 (%)	5・6年生 肯定的 (%)
①自分は学校のリーダーとしての責任があると思う	17	92
②自分は学校の役に立っていると思う	58	92
③同じ学年の友達と協力し、支え合っていると思う	83	100
④たてわり班活動では班の中心として活動していると思う	55	100
⑤たてわり班活動では、自分のことだけでなく、まわりの方のことを考えて行動している	58	100
⑥たてわり班で何か活動するのは楽しい	83	100

## 【成果】

### ①人との関わりを広げる活動について

○たてわり班のことについて直接質問した④・⑤・⑥のいずれにおいても、高学年全員が肯定的に捉えている。人との関わりを広げる、その核となるたてわり班活動において、高学年が高い意識をもっていると言える。たてわり班活動の充実により、高学年のリーダーとしての役割認識と実感が高まったと考える。

### ②一人一人の自主性を高める活動について

○「自分のことだけでなく、まわりの人のことを考えて行動している」と答えた高学年は、100%であった。低学年からたてわり班活動を経験してきたなかで、高学年として「まわりの人のことを考えて行動する」ことよさを理解し、自主的に行動できるようになったと考える。

### ③仲間を大切にしよう活動について

○「自分は学校の役に立っている」と答えた高学年は、92%であった。たてわり班活動などで、下級生のために何かをしたり、その度に感謝されたりすることによって、自己有用感や他者理解が高まったと考えられる。

## 【課題】

▲たてわり班での活動は充実していて、つながりも深い。しかし、たてわり班のつながりだけに偏っているとも言える。たてわり班以外のつながりを、もっと深めていきたい。たとえば、休み時間を増やし、遊ぶなかでさまざまな人との関わりを深めていけるような工夫を考えている。

▲高学年の役割や意識が高く、それが集団を支えているのは間違いない。だが、下学年にとっては、高学年に頼りすぎたり、「(高学年になったら頑張ろう。)だけど、今はいいや。」という気持ちを生み出ししたりしている面もある。たてわり班活動のなかでも、下学年が活躍したり、リーダーシップをとったりする場面を設定していきたい。

## ○研究仮説③：学校、家庭、地域が連携した人権教育の推進 (人権意識を高める環境づくり)について

### 【成果】

○参観日の工夫をすることにより、保護者だけでなく、お年寄りや地域の方も来校しやすい環境になってきている。子どもたちにとっても、様々な方と関わることができる良い機会となっている。

○授業公開だけでなく、活動も工夫することにより、今まで関わったことがない人との関係づくりにつながっている。人権の花作りの活動では、子どもたちに運営を任せることで、生き物を大切にする心はもちろん、縦割り班のつながりを大切にする心も育ってきており、学年間の良いつながりが伝統になりつつある。

○ぼかぼかロード(人権ロード)を充実させることで、子どもたちが自然にいろいろな人権について目にする機会が増えた。立ち止まって掲示物を見る子どもたちへの話題提供にもなっている。

○教職員のよい関係を子どもたちが見ることで、子どもたちに安心感が生まれている。また、「自分たちは見てもらっている」という意識が高まっている児童が多い。

## ○研究主題に関わる全体としての成果

今回の研究で、人権・同和教育の研究主題に向けて、学校全体・教職員全員で取り組んだことの成果が大きい。

研究推進会議や授業づくり部・集団づくり部・環境づくり部などの校内組織を整備すること、年間カリキュラム表を活用することなどで、全教育課程で人権・同和教育を推進することにつながった。

その過程では、教職員それぞれが普段行っている人権・同和教育に関わる指導を可視化することができた。そしてそれらの一つ一つを共通理解し、全体で合わせて計画を立て、全教職員で意図的に行うことができた。

本校の教職員は、様々な立場の人で構成されている。管理職、教諭、講師、養護教諭、事務、施設管理員、学校司書、支援員。その中には、経験年数の多い人から、今年度初めて教職に就く人まで様々である。そのような全教職員が取組を共通して行うことができたことの成果が大きい。指導案検討を重ねて研究授業を行ったり、普段の人権・同和教育に関わる授業をお互いに見合ったりした。その結果、どの教員も道徳科の授業を中心に授業の構成力と指導力の向上がみられた。

また、本校は小規模校で、全教職員が学校の共通した一つ取組に関わり、児童と関わる機会が多い。（掃除や給食の時間、学校行事など）このよさをいかして、教員だけでなく全ての職員が研究授業に関わったり、校内掲示を作ったり、人権・同和教育につながる、児童への指導や声かけをしたりすることができた。この結果、教職員の人権・同和教育の理解と人権感覚が高まり、連携が強くなった。このことが、研究主題達成や児童の成長・変容につながった。

#### （友だち大すきの期間を通して見られた児童の変容）

年度当初は友だちの言動に受け入れられない部分もあり、きつく注意する場面も見られた。今ではそれがほとんどなくなったばかりか、友だちの言動の裏にある気持ちを汲み取ったり、よいところを認め合ったりする言動が増えている。各教科の授業や、朝の会や帰りの会では、自然と話す人に体と顔が向くようになった。友だちのがんばった話であれば、歓声があがり、よかった話であれば、拍手が起きることが多くなった。できなかった話であれば、励ましの声があがり、よくなかった話であれば、「自分もあった。」「次からは、こうしたらいいよね。」など、自分事としてよく考える声があがるようになった。3・4年生と5・6年生の算数の授業はわりと学習のため、自分達で進める時間が多いが、その中で友だちがわからなくて気持ちが落ち込んでいた時、周りの子が熱心に教えたり、フォローしたりする姿が見られた。また、「間違いは、あってあたり前なんだよ。」「最初は分からないものだよ。」「やっっていくうちにわかるから、大丈夫だよ。」などの言葉が聞かれるようになった。さらに、わからなかった子が問題を解けたとき、拍手がおこり、「やったじゃん」という言葉も聞かれた。自分から見たら当たり前でできることも、否定的に捉えず励ましたり、できなかったことを一緒に喜び合ったりするような、友だちを大切に、安心してすごせる集団づくりが高まったことを感じた。

また、周りの気持ちを汲み取ったりアドバイスを受け入れにくかったりした児童が、それらを受け入れて動けるようになってきただけでなく、自ら友だちのために動いたり、がんばりを認める声をあげたりするなど、成長した姿に驚くこともあった。

#### （がんばる自分大すきの期間を通して見られた児童の変容）

できないこと、難しいこと、指摘されたことに対してあきらめがちで気持ちがくじけがちだった児童に、粘り強さがついてきた様子が見られるようになった。

勉強に対して、課題が難しいと言動がきつくなったり、字が雑になるなど集中がとぎれがちであったりする児童も、考え続けたり問題を解き続けたりする様子が見られるようになった。それは、周りからのあたたかい声かけであったり、児童自身の粘り強く取り組もうとする気持ちの向上があったりするためだったと思われる。

何事もあきらめやすかったが、音楽会に向けた練習で難しいパートの練習に取り組む児童も見られた。一度は弱音が出たが、それから練習に励み続け、練習時間に少しでも時間があればひたすら練習をし続けるようになった。それは、ただ「できるようになりたい」という一心からだった。とうとうひけるようになった時は、とても嬉しそうな表情で、周りからも拍手が起こった。そして、児童の普段の様子にも変容が見られた。字が丁寧になったり、長い文をノートに書くのに最後まで集中力がついたり、マラソンが速くなったりするなど、様々なところに変容が見られた。

このように、児童一人一人の様子、各行事や各教科、各活動の様子から、最後までやりきろうという意識が様々な活動にあらわれるようになった。



(クラスと学校大すきの期間を通して見られた児童の変容)

この時期の道徳の授業や各教科の授業、各行事を通して(クラスと学校大すき)をめあてとしたことは、一番合うめあてと時期だったことが、児童の変容から感じられた。

クラスの集団として、1年間で一番大きな行事である、学芸会があった。この学芸会を通して、それぞれの学級でクラスの仲間と力を合わせて劇を演じるチームワーク、本番に向けて準備を協力して進めていくチームワークがとてもよくついた。日に日に、クラスの劇の成功のために自分ができることをしていこうとする態度、友達のがんばりを認め、取り入れて、さらに皆で上達させていこうとする協調性と積極性が上がっていくのを感じた。中には、周りの学年の劇の成功のために気を遣う児童や、高学年として司会進行を工夫し、全校発表を盛り上げようとする児童の姿もみられた。本番は、各学級のチームワークが感じられる、大変良い発表だった。地域の方も大勢見に来られたが、とても好評であった。学芸会の成功を経た後の2学期末は、児童がクラスのチームワークが上がった実感と自分がクラスや学校のために力を合わせてがんばることができた達成感をもった、良い雰囲気であった。この時期にQUのアンケートを行ったが、1学期と比べて、学級の雰囲気や児童の学級への帰属感などが大きく上がった。

(大すき、わたしの一年間の期間を通して見られる児童の変容)

現在(大すき、わたしの一年間)の時期にある。その中で、「児童が自分の課題に対して伸び伸びと前向きに取り組む姿勢」、「友達のがんばりを当たり前のように認め合えるあたたかい雰囲気」、「集団でよいことも改善すべき課題も、自然と児童同士で声をかけ合ったり、共有して話し合ったりできる集団意識」などが日常的にあることから、今の学年における個々人と集団としての成熟を感じる。また、教職員から言われて動くのではなく、児童が主体的に活動していく姿勢を、この時期に強く感じる。それは、1年間を通して4つのめあて達成に近づいたことと、これらのめあてを児童が自ら主体的に達成しようとするようになってきているからだと感じる。

3学期の各学年の行事としての1年生の一日入学、2年生の参観日の学習発表会、3・4年生の2分の1成人式、5・6年生の子ども議会や、全校の行事としてのなわとび大会と6年生を送る会、卒業式がある。例えば3・4年生の2分の1成人式では、4年生の個々人の成長だけでなく、3年生から4年生への思い、4年生から3年生への思いに溢れた、絆を感じるあたたかなよい式となった。このようにどの行事でも、一人一人が考え、友達と力を合わせる主体性とチームワークで成功させる様子が見られた。

今年度の本研究を通して、研究仮設である一人一人の自己肯定感を高めること、安心してすごせる集団づくりや学校、家庭、地域の連携を進めることができたと感じている。また、研究主題である自他を大切にすること、意欲的に行動すること、それらによる、より深い学び合いにつながっていったと考える。

そして、本研究が学校の一体感を高めるとともに、児童・教職員ともに自分達の力がよくついたという達成感をもって、今年度を締めくくることができた。2年次である本研究は締めくくりとなるが、この4つのめあてと年間カリキュラムの活用は来年度からも引き続き行っていきたい。今後も、人権・同和教育を基盤とした教育活動を行っていきたい。